

ポスト2020の東京ビジョン —文化のサステイナビリティと都市の未来

東京大学大学院
吉見 俊哉



東京都心北部（谷根千、湯島、上野、本郷、神保町、秋葉原）を統一して、東京の文化の可能性を可視化する「東京文化資源区構想」という試みがある。2020年の東京五輪をめぐる国内

では問題が相次いでいる。「より速く、高く、強く」成長すべき、という1964年五輪からの価値転換がなされていないことが原因だ。成熟・循環型社会となった今日では、多様な・耐久力・持続可能性・再利用を重視していくべきだ。

1964年の東京五輪を経て、都心の文化の中心は北東から南西に移動した。北東は、かつては文化の中心部で、神田、神保町には書店街が残っている。上野では戦前に博覧会の殆どが行われ、今も博物館が残る。秋葉原は日本のポップカルチャーの中心地だ。都心北部には古いものから新しいものまで日本の文化資源が集中する。都心北部へのリバランスを実現する具体的計画によって、アジアや東北との結節点と

なるこの地域を再活性化させていくことは、アジア・日本・東北・東京がどのように繋がっていくのかを示すことにもなる。文化は元来「耕す」を意味し、そのプロセスが重要だ。味なワインは良い土壌にできる。都市という土壌を耕す際の良い土壌は歴史的蓄積から生まれる。文化は長い年月をかけ、形を変え、継承され、耕されていく。乗り越えられていく価値もあるが、都市においてそうした過去との対話を考えさせてくれる可能性が都心北部にはまだある。

質疑応答では、「東京に文化圏は複数あることが望ましいが、高層ビルの並ぶ大都市は世界にあふれており、数百年をかけて文化を築いてきた都心北部こそ世界に東京の価値を発信するポテンシャルを秘めた地域である」「学術・芸術・出版・ポップカルチャーなどの文化圏を繋ぐために21世紀の大学は、研究・教育のみならず、社会と連携し、社会的実践の場へ教員と学生が繰り出していき、新しい知を生み出すネットワークとなっていくべき」など、時間を延長して活発な議論が繰り広げられた。

Profile 吉見 俊哉 YOSHIMI Shun'ya

● 東京大学大学院情報学環教授。東京大学副学長。社会学・文化研究・メディア研究専攻。集まりの場でのドラマ形成を考えるとそこから近現代日本の大衆文化と日常生活、文化政治を研究。主な著書に、「都市のドラマトウキョー」（河出文庫）、「博覧会の政治学」（講談社学術文庫）、「声」の資本主義（河出文庫）、近著に「文化学部廃止」の衝撃（集英社新書）、「視覚都市の地政学」（岩波書店）等、多数。